

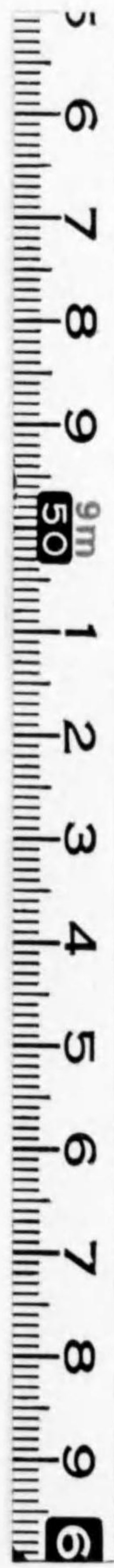
大鎧海老洞篠塚

67-406

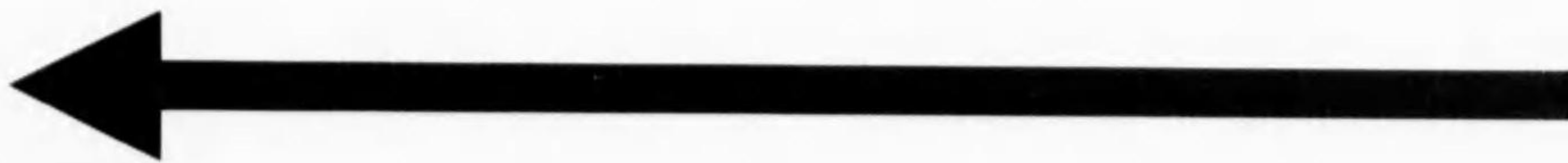


1200501281597

67
406



始



725



67
406

か
 ね
 ぶ
 り
 ひ
 あ
 び
 ぎ
 り
 の
 ぶ
 ち
 大鏡海老洞縁塚





大鏡海老洞御家

陸村仲

か
か
よ
ら
ひ
あ
ひ
ご
う
の
い
ち



い
れ
た
り



大坂の
徳丸
今



徳丸
今

徳丸
今



富本
伊達喜美

大かきや
まろく
才助

又右
伊達
又右



三法
名見崎
徳次

富本
世志太夫

富本
世志太夫

星
与三

雪
国
景
籠

大かきや
まろく
才助

大かきや
まろく
才助



あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを



あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

あつはなを
とつとつと
この門を
をきつて
おのれを
おのれを
おのれを

狂言作者



舞臺の
狂言



おきん
おきん
おきん

鳥居清長画



おきん
おきん

おきん
おきん

おきん
おきん

白妙日月の

鳥居清長畫繪本番附

大おほ鎧よろひ海ゑ老お洞どう篠しの塚づか

一冊

原本 東京 加賀豊三郎家所藏

大鎧海老洞篠塚 中村座

南條左衛門、五人の山伏を捕へ、先達こそ大塔の宮なりと詮議の折か
ら、長崎次郎を欺き、宮をかこふ。

長崎次郎左衛門 介十郎 南條左衛門 純右衛門

大塔の宮 門之介 やたの彦八 染藏 (二丁ウ)

高時入道酒宴に長じ、白拍子天王寺のあさま、住吉のふじ兩人を召寄
せ、酒の相手にせんといふ。

高時入道 三甫右衛門 ふし部伊賀守 又太郎

住吉のふじ 崎之介 天王寺のあさま 市松

(二丁オ)

高時入道、大塔の宮を手込にし、日月の御旗を奪ひ、御旗にそなへをあ

げんといふ。かゝる所へ、新田の家臣栗生左衛門奴姿にやつし、大塔の宮に御旗を奪ひ返しおしとそ申。とほうもない。

高時入道 三甫右衛門 權藤六綱藏
高橋三郎 此藏 工立(栗生)左衛門 海老藏
彌六入道 八藏 大塔の宮 門之介
ふし部伊賀守 又太郎 南條左衛門 純右衛門

(二丁ウ、三丁オ)

五大院の左衛門、百姓與茂作を追掛來りしに、としもと公に行合、是非なく勅使御迎いなりと隠し給ふ。としもと公、百姓があはてたる體を見て、乗物へのせ、館へ連れて行、

中納言としもと公 少長

としもと公侍
花形伊織

鶴五郎

五大院の左衛門 友右衛門

小山田百姓
與茂作

八百藏
(三丁ウ)

五大院左衛門、青麥婆と心を合せ、犬神の法を行ひ、高時入道の息女伏見の前に、犬の病の悪名をつける。百姓與茂作、此所へ來り、様子を窺ひ、母の悪事を聞入る。

五大院左衛門 友右衛門 百姓與茂作 八百藏

(四丁オ)

小山田の青麥婆 海老藏

五大院左衛門、花形伊織、長崎次郎兩人に毒酒を吞ませ、高時入道に犬の病をうけさせしも、我が工みなりといふ。

五大院左衛門 友右衛門 大だち三郎
女房しき浪 小園次

長崎次郎 介十郎 花形伊織 鶴五郎
(四丁ウ)

五大院左衛門、高時入道に犬の病をかけし所に、長崎勘解由左衛門に顯され、法力盡きて我が姿を現はし、長崎に討たる。

高時入道 三甫右衛門 五大院左衛門 友右衛門

長崎勘解由左衛門 海老藏 座頭いま一 音八

(五丁オ)

是より第二番目始まり。

もり國親王 三甫右衛門 楠田門丸 市松

徳塚五郎 海老藏 村上彦四郎 雷藏

大佛太郎 傳五郎 赤松次郎 傳九郎

新田義貞 介十郎 (五丁ウ、六丁オ)

相模次郎時行、あんばいよしと身をやつし、此廓へ入込み、皮踏屋門兵衛、相模次郎が繪姿を出し、これこそ御尋ね者なりといふ、高氏の奴江戸平繪姿と引合せ、本名名乗れといふ。

高氏 公少長 幸四郎

高氏公奴江戸平本名大森彦七 又太郎 やり手あるい 和田藏

傾城 錦木 要藏 高氏公家來 浦右衛門

皮踏屋門兵衛 友右衛門 皮踏屋荷持善八 善次

是より淨瑠璃始り。

大森彦七 又太郎 松本屋娘おころ 常世

(六丁ウ、七丁オ)

ゆき ちよひわのすごもり 雪催閨巢籠 富本豊志太夫 富本豊太夫 富本伊津喜太夫

三段名見崎徳次 門之介 ヲキ喜惣次 與三次

大塔の宮 片桐彌七 八百藏

大かな屋白妙 半四郎 高氏公奴江戸平 又太郎

此所大あたりく

(七丁ウ、八丁オ)

年氏思はず、兄高氏に對面し、紛失せし日月の旗百日切に詮議し出さんといふ。

年氏鏡に白妙が姿、鯉魚のかたち映るゆへ怪しみ、正體を顯はさんと詰掛る。

足利高氏 少長 彌七實は足利年氏 八百藏
白妙實は沼の尾の鯉魚の精靈 半四郎 皮踏屋門兵衛 友右衛門

(八丁ウ)

五郎八女房をわざと去り、門兵衛に取持ち、酒を勸むる、門兵衛酒に酔ひ、我身を忘れ、本名を明かす。

皮踏屋門兵衛、五郎八が女房お時に、無體に戀慕仕掛る。

五郎八 幸四郎 皮踏屋門兵衛 友右衛門
本名相模次郎 半四郎 本名入江左衛門

(九丁オ)

五郎八本名相模次郎時行、親の血筋にや、五つの鐘のなる時は、父高時入道のやみし犬の病を受苦しむ所へ、大塔宮立出、難儀をすくふ。

五郎八 幸四郎 大塔の宮 門之介
相模次郎 半四郎

(九丁ウ)

門兵衛、五郎八が一子五郎吉をとらへ、親五郎八が本名を明かさせんと打擲する所へ、相模次郎飛んで出、門兵衛を打据へ、仕返しをする。

九郎八 幸四郎 五郎八一子五郎吉 高麗藏
相模次郎 幸四郎 門兵衛 友右衛門

(十丁オ)

白妙、日月の御旗を高氏に渡、本性を現はす。
義貞、相模次郎を取捲く。

足利元氏 八百藏 大森彦七 又太郎
足利高氏 少長 相模次郎時行 幸四郎

鯉魚の精靈 半四郎 新田義貞 介十郎

此藏 善次

狂言作者 中村重助 櫻田治助 烏居清長畫

(十丁ウ、十二丁オ)

大鎧海老胴篠塚解説

木村捨三

本書は、繪本番附、略して繪番附ともいふ、ある狂言が出揃ふてから、芝居内茶屋等で賣出したもので、その目的と作用は、観客に狂言の略筋と、配役を示し、観劇の手引草としたので、今もある筋書に相當する。また別に繪草紙屋から賣出したものもある。

繪番附のはじめは、元祿期を中心として行はれた狂言本から發生してゐる。狂言本とは、その脚色の略筋と、臺詞の要點を記録板行したもので、観衆に豫備智識を與へるのが、その目的であつた。これに繪を挿入してゐるから、繪入狂言本ともいふ。その文脈といひ畫風といひ、浮世草子のそれに擬してゐるのは、時代の風潮とはいへ、注意すべきことであらう。半紙本で一冊十丁、乃至十五丁が通例である。享保度に入つて、やゝその形式が變化し、寶曆明和と下

つて、本書に續く、その變遷は大體三都とも共通し、さらに書史的にも興味ある問題である。

繪番附の發生と目的は、前述の如くであるが、狂言本の詞章をぐつと略して、繪畫を主とし殊に享保以來は、役割番附が出来たので、從來表紙見返しにあつた後人替名の部分を省き、これをその畫面にのみ記入したのが、本書一類の特色であらう。

しかして書形も、半紙半截二つ折となり、紙數も六七丁から十丁位、表紙も共紙で、本書に見る如く、題簽に、櫓紋と名題、その下に座名を記し、地模様もまたその時々に応じて、それぐの意匠に成る。

因に本書表紙に「いと登代」と墨書あるは、原藏者の手澤なるべし、いま古きを懐しむのあまり、今回の複寫ではそのままにした。

本書は、『新修日本小説年表』に、黄表紙の天明年間に入れてあるのは誤りで、實は繪本番附であることは、原本の現出によつて明かとなつた。即ち安永元年十一月、江戸堺町中村座の顔見世芝居で、名題は『大鑑海老桐篠塚』といふ、この狂言で、明和七年冬、松本幸四郎の舊名

に復した四代目市川團十郎が、養父二代目團十郎の名跡を繼いで、二代目海老藏と改名し、その養子市川高麗藏が、四代目松本幸四郎となり、その子市川純藏が、父の名高麗藏を襲いたのであつた。

この時は、市村座には、九代目市村羽左衛門、尾上菊五郎、同松助、大谷廣治が出勤し、羽左衛門の土蜘蛛の精といふ變化の所作事で活躍し。森田座は、五代目市川團十郎を筆頭に、中村富十郎と山下金作兩人の、魂の入替る狂言に、中村助五郎、坂東又九郎、佐野川市松の諸優がをり、殊に澤村喜十郎以下六名の改名披露を當込んで、いづれも滿都の人氣を集中せんとした時のものである。

この狂言の趣向は譯文にて見らるゝ如く、建武中興を主題とし、その筋こそ荒唐無稽の嫌ひあれ、その頃は、謂ふ所の江戸歌舞伎の黄金時代で、その大まかな演出は、歌舞伎十八番のそれに似る如きものばかりだつた。その概況は『江戸芝居年代記』安永元年、中村座の條に、

大鑑海老桐篠塚 同年冬

栗生左衛門に而奴の暫く、篠塚の荒事、如六郎左衛門の武道、互新左衛門の半道、新田四天王の四やく海老藏一人にて致す、青むぎば、あ敵やくも大出来也

改名 松本幸四郎改 海老藏、市川高麗藏
改名 松本幸四郎、市川純藏改 市川高麗藏

とあり、また『花江都歌舞伎年代記』同年の條に、

顔見世狂言、中村座、大鎧海老胴篠塚、幸四郎改海老藏、高麗藏更名幸四郎、純藏改こま藏
四代目幸四郎
これなり守邦親王三甫右衛門、栗生左衛門海老藏暫あり、小山田太郎八百藏、はや咲
崎之助、二ばんめ鹽梅よしの五郎八幸四郎、革たびや門兵衛に大谷友右衛門、せんたくやの
お時半四郎、二やく大叶屋のしる妙、實、鯉の精也、片桐彌七八百藏、大塔の宮門之助、大
森彦七又太郎也。

とある。明和安永の江戸劇壇は、前後無比の盛觀で、上置きに木場の親玉といはれた四代目市川團十郎(本書の海老藏)中村仲藏(秀鶴)、初代尾上菊五郎に、行くとして可ならざるなき九世市村羽左衛門、女方には二代目瀬川菊之丞(王子路考)中村松江(里好)、四代目岩井半四郎と、老巧の中村富十郎(慶子)の外、本書に現れたる四世松本幸四郎、二世市川門之助、二世市川八百藏、二世中村七三郎(少長)、二世山下金作、二世中村傳九郎等の名優があつて、梨園の花は爛漫として咲き亂れてゐたのである。その光景は、本書によつても肯はれるであらう。

從來、歌舞伎に專屬してゐた江戸長唄は、新に移入された淨瑠璃諸派と共に、劇場音楽とし

て發達した。享保に入りて、東下の宮古路豊後様が、市村座に聘せられて、大いに好評を博して江戸生拔きの諸流を凌駕するに至つた。その支流常盤津節から出て、優婉な曲節を以て立つた富本節もまた芝居に取入つた、それは寶曆二年、中村座の春狂言『糸櫻山路傍』からである。

富本節の祖は、富本豊前掾藤原敬親といひ。俗稱福田彈司、宮古路文字太夫(常盤津)の門下で、はじめ品太夫、のち小文字太夫と改め、寛延元年文字太夫と絶ち、同二年豊前掾を受領した後年筑前掾となつた。明和元年十二月二十二日歿す、年四十九。淺草新寺町專修院に葬つた(近年染井墓地南隣に移轉)。

本書の所作事『雪催閨巢籠』も、實にその富本節である、この曲は別名を「片桐彌七」といひ、その歌詞は、國書刊行會本『徳川文藝類聚』第九卷所收の『櫻草集』にある(別項に轉載したから参照せられたい)。

その畫面にある出語り太夫の内、富本豊志太夫は、初代豊前掾の實子で、幼名午之助、明和七年十一月豊志太夫と改め、安永六年正月、二代目豊前太夫となり、文化十四年十一月、嵯峨御所から免許を得て豊前掾を受領した。この人の一代は、富本節の最盛時で、斯流の名曲、十に八九はその語り物に屬する。その居所に因んで、柳橋の太夫といはれ、黄表紙の『悦最貞蝦

夷押領』(天明八年版)にも「かうせり出される後ろで、柳橋の太夫に語つて貰ひたい」とある。家紋の櫻草は、川柳にも、黄表紙にも取扱はれ、その名聲は、他の諸流を壓してゐた。文政五年七月十七日六十九歳で歿した。脇語りの豊太夫、三枚目の伊津喜太夫は、ともに初代の門人、殊に伊津喜太夫(後に齋宮太夫)は、若年なる二代目家元の後見となり、後年剃髪して延壽齋と改めた人で、かの清元節の初祖延壽太夫の師である。

また本書は、鳥居清長の署名あるものとして、『浮世繪藝術』第三卷第四號(昭和九年五月發行)に掲載した、落合直成氏所藏の、明和七年五月、市村座上演の『角前髪狩場姿視』の墨摺繪に次ぐもので、清長の出生を寶曆二年と定むるときは、實に二十一歳の所畫にかゝるのである古典的な鳥居風の中に、清新な筆致の潜在する點は、既に風俗畫家としての素地が現はれ、こゝにも清長ぶりが看取される。

芝居繪を以て立つてゐる鳥居派に育つた清長は、美人畫によつて名を成したので、或は傳統破壊者と目さるゝかも知れぬが、それは清長の個人的環境を知らざる一知半解の論である。鳥居一門の人々で、芝居繪以外のものに、筆を染めたのは、他にいくらかも事例がある。さはれ清

長が独自の境地を拓いて、近世藝術の上に、重要な地位を占め、その影響を後人に與へた業績は、あらゆる愚説を排して餘りある。清長は書肆と家主を兼業してゐた、畫道は必竟するに餘技であつた。謂ふ所の藝に遊び、道を樂しむの人だつた。古法を墨守してゐる芝居繪にのみ踰踏してゐる筈がない、それが師家に對する禮儀でもあらう。しかしその謙讓な態度は、天明五年師清滿の死歿に會し、斷然その優越な立場を捨て、鳥居家の興隆に盡し、六尺の孤を托せらるゝに至つた、その経緯は從來の清長傳を綜合して考へられる。かやうな想到は、人としての清長を、さらにく偉大ならしめる事ではないか。

鳥居清長は、通稱白子屋市兵衛(或は本姓關口、俗稱新助後に市兵衛と改む)といひ、寶曆二年相州浦賀に生れ、早く江戸に出て、本材木町一丁目書肆と家主を兼業してゐた。その傍ら鳥居清滿の門に入り、繪事を習得したが、その畫風は、本書にも見る如く、一種の特長があり流麗な筆致は美人畫家たるに適し、専ら版畫に従事してゐたらしい。天明五年その師清滿の歿するや、専ら芝居繪看板、番附等を描くを依囑されたが、鳥居家の相續者でないものが、これを畫くは、師家に對する禮でない、固辭して受けず、その代りに歌川豊春を推薦した。しか

るに不馴な豊春は、天明六年の顔見世番附に、名題役者を書き落したので、大悶着を起し、結局清長は、鳥居家の遺子庄之助(後の清峰)の成長まで、中繼養子となり、こゝに鳥居の四代目となつた、この相續は天明八年のことだといふ。そのため天明五年から同七年までの間は、他流のものが描いてゐたとも傳へられてゐた。然るに高野辰之博士所藏の顔見世番附中に、天明六年の市村座のものに豊春畫あり、清長は連年これを畫きゐたるを寓目した。これまた清長傳を補ふべき一資料として珍重すべきである。

鳥居家を相續した清長は、爾來芝居繪にのみ精進し、他の戯作物に筆を執らなかつた。寛政末年以後は、その挿繪を見る所尠くないのは注意すべき事である。文化十二年五月二十一日、年六十四で、本所番場の居で歿した、法名長林英樹信士、本所回向院に葬つたが、いまその墓は無き。

□

要するに、本書は繪本番附を書史的に考究する場合にも好材料であり。また劇壇全盛時代のものとはいへ、その頃の脚本で、今日傳存する所頗る尠少なので、本書の現出によつて、當期演劇の梗概を知るを得る、就中二世市川海老藏、三世松本幸四郎、二世市川高麗藏襲名時のも

のであることは、江戸歌舞伎史料としても、重要なものである。

さらに、鳥居清長初期の作品であることは、浮世繪研究家、殊に清長の藝術検討に缺くべからざる資料である。淨瑠璃太夫の出語りを背景とせる清長得意の構圖は、すでに本書によつてその萌芽を現はし、それが牽いて、富本節がいかに當時の人氣に投ぜしやと考ふるに至つては當時歌謡の消長を語るにも充分であらう。これ本書を提供する所以の、徒爾でないことを知得せられたい。(昭和十・五・一)

清長の黄表紙における業績は、本書と同時に複版發行せる「通増安宅關」兒訓影繪噺「色男其所此所」の解説に詳述してあり、且つその作品は、清長研究に、必須の資料であるから参照せられたい。

67
406

第 限
定 版
號 版

昭和十年五月十八日印刷
昭和十年五月二十四日發行

清長書齋發行
大鎧海老副篠塚與附
定價 一圓

東京市淀橋區東大久保二丁目二百廿番地

編輯者 **圖說復版會**

代表 木村捨三

東京市神田區須田町一丁目七番地

發行所 **巧藝社**

電話神田二二九四番
振替東京四〇六六六番

東京市京橋區西八丁堀一丁目四番地
印刷所 **巧藝社印刷所**

67
406

終

